【翻訳】

リヒャルト・ヴァーグナー
ある降伏——古代の手法による喜劇

Richard Wagner, *Eine Kapitulation* —— *Lustspiel in antiker Manier*

杉谷恭一 訳

Kyôichi SUGITANI

要旨

Der vorliegende Beitrag stellt eine vollständige Übersetzung des Lustspiels dar, das Richard Wagner im November 1870, während die Preußen im Deutsch-Französischen Krieg Paris umlagerten, in Manier der griechischen Komödie schrieb. Die Hauptpersonen sind bekannte zeitgenössische Franzosen, wie Victor Hugo, Nadar, Mitglieder der republikanischen Regierung usw., und der Verfasser lässt sie auf der Bühne verschiedene Torheiten treiben. Wagner gibt im Vorwort an, er habe beabsichtigt, durch diese Komödie die Kapitulation der Deutschen vor der französischen Kultur zu karikieren, und nicht wenige Forscher haben diese Angabe für wahr gehalten. Wenn man aber das Stück genau liest, wird deutlich, dass dieses Lustspiel in der Tat darauf abzielt, die Franzosen bösartig zu verlachen.

キーワード：普仏戦争　フランス文化　ギリシア喜劇　アリストパネス　嘲弄

序文

一八七〇年の末ごろ、すでにドイツ軍によるパリ包囲[一]が始まっていたときに耳にしたのだが、ドイツの劇作家たちは、われらが敵の窮状につけこみ、これを素材にして民衆劇を作ろうと才知を傾けていたとのことである。なにしろパリ市民がすでに出兵開始以前からドイツの敗戦を前提にし、それを芝居に仕立てて楽しんでいたのだから、わたしにはドイツの劇作家のもくろみが不当なことだとはとても思えず、やがては頭のいい連中がこのような題材を民衆向きにあしらって、首尾よく独創性を示すだろうと期待すらしたのであった。ところが、これまでのところ、わが国のいわゆる民衆劇場の最も深遠な領域においてさえ、すべてがパリで創案されたものの拙劣な模倣に低迷していたのである。この問題に対してわたしは心躍る思いで関心を寄せてきたが、ついには期待が嵩じて焦燥に転じることになった。こうしてわたしは、気分が上向いていたときに、ほぼわたしが待望していたような劇の草案を自らの手で書いたのである。そして、真剣な創作[二]を晴れやかな気分で中断し、わずか数日のうちにそれを完璧に仕上げ、必要な音楽を作ってみるようにと、当時わたしのもとに滞在していた若い音楽家[三]に引き渡すことができたのであった。わたしたちは匿名でベルリン郊外のやや大きな劇場にこの劇の上演をもちかけたが、劇場は断っ

てきた。事態がこのように転じたことで、若い友人は大きな不安から解放される思いがしたのであったが、それというのも、彼はこの劇にうってつけのオッフェンバック風[四]の音楽を作ることなど、自分にはとてもできそうにないと告白したからである。こうしてわたしたちは、何事においても天賦の才と生まれながらの使命が必要であることを認識し、今回の場合、オッフェンバック氏がその双方を具えていることを心の底から認めたのであった。

いま、わが友人たちにこの笑劇の台本を提示するわけであるが、それは断じてパリ市民をあとになってさらに笑い者にするためではない。わたしの劇のテーマはフランス人の一面を明るみに出しているが、他ならぬその一面に光を当てると、その反射によって実はわれわれドイツ人のほうが彼らよりも滑稽であることが際立つのである。すなわち、彼らがいかなる愚行においてもつねに独創的であるのに対して、われわれは彼らの愚行の不快な模倣をしながら、滑稽さのどん底にまで堕ちていくのである。この実に腹立たしいテーマは、否応なくわたしの脳裏に浮かんできては、少なからぬ快適な日々を台無しにしてくれたのだが、それでも、いつか幸福なひと時に、これが明朗で罪のない笑いを呼び起こすものであることが明らかになるなら、この冗談めかした台本（ただし、これにふさわしい音楽を見出すことがわたしたちにはできずじまいであったが）をわが友人たちに提示し、わたしが執筆中にしばし感じたのと同じ束の間の解放感を喚起しようとしても、彼らが不快感を催すことがないようにと願いたいものである。

登場人物[五]

ヴィクトル・ユゴー[六]
国防軍のコロス[七]
　モテュー　大隊司令官
　ペラン[八]　オペラ監督
　ルフェーヴル　公使館参事官[九]
　ケラー
　ドルフース　　アルザス人
　ディーデンホーファー　ロレーヌ人
　ヴェフール、シュヴェ、ヴァシェット　　コロスの長
ジュール・ファーヴル[一〇]
ジュール・フェリー[一一]
ジュール・シモン[一二]　　政府のメンバー
ガンベッタ[一三]
ナダール[一四]
フルーランス[一五]、メジーとアルジェリア狙撃兵[一七]たち[一六]
パリのネズミたち

一八七〇年、晩秋のパリ

舞台設定

舞台は開口部から奥行きの半ばまでパリ市庁舎前の広場を示し、劇中では古代の意味における「オルケストラ」[一八]として利用される。中央には「テュメレー」[一九]の代わりに共和国の祭壇が据えてあり、その上にはジャコバン党の帽子と「束桿」[二〇]が載せてある。祭壇は前方に向かっ

て開口部[二一]があるために、観客に向けられたプロンプター・ボックスのような外観を呈している。左右から舞台後方の高い部分へと通じている古代様式の階段がパリ市庁舎のバルコニーを形作っているが、これが下方の階とともに唯一残された建物の部分である。その上には、ただノートルダムとパンテオンの先端が突出している空しか見えない。舞台前景の右と左の端にはストラスブール[二二]とメース[二三]の巨大な彫像[二四]が立っている。――夜明け。四方八方から起床を告げる太鼓の音が聞こえてくる。

――

ヴィクトル・ユゴー

（祭壇下の奈落から頭を出し、肘のあたりまでよじ登ってプロンプター・ボックスの穴から身を乗り出す。うめき声をあげて額の汗を拭う。）

ああ！　ついに　われ息づきたる　汝こそ　聖き都の大気なれ！
パリよ　おお　いたくわれを求めし　わがパリよ！
われは行く　いな　われ来たり　まことにわれは　ここにあり
ほどなくして　したためん　わが身に起きし　ことどもを！
しまった！　――アレクサンドラン[二五]で語ってしまった！　どうして古典主義に立ち戻ってしまったのだろう？　わたしは満身これロマン主義のかたまりだというのに。わが遍歴の驚異は、わが無比なる散文によってしか報告できないのだ！『レ・ミゼラブル』[二六]を見よ！――そう、わたしはあの小説に書いたことを[二七]、すっかり体験してきたところなのだ！　信じられん！　こんなことをやってのけたのは、わたしだけだ。ああ！　詳細な調査に熱中することが、こんなに役に立つとは！　聖なる都の下水道を精査したことが[二八]、全文明を救う道へとわたしを導いたのだ！

おお、「フランス」ヨ！[二九]　これがおまえの偉大なる詩人にとっては、追放から脱して故郷へといたる道なのだ！　おお、パリよ、おまえのはらわた[三〇]の中をさまよってきたことを思い出すと、ぞくぞくするような歓喜で、この身がまだ震えるのを感じるぞ！　わたしは誰よりもよく通路を知っていた。魔術的なわが手に宿る魔力が、通路を開いてくれたのだ。わたしはプロイセン軍を突っ切ってここに来たのではない。彼らの下を通り抜けてきたのだ。途方もないことではないか！　しかし、天賦の才がなければならない。それに加え、犠牲的精神も必要だが、わが洗練された情熱にこれが具わっていることは、周知の事実だ！　――だが、こんなことをしゃべりたててなんになる？　これらはすべてわが最新の小説のためにとっておいたほうがよい！　「神ヨ！」[ディユー]これを小説にするなら、この奇想天外なパリ帰還だけでも百二十巻の材料になる。――いまこそ見るのだ、ヴィクトルよ、ここがどこであるのかを。わたしは本能によって確実に導かれてきた。ここはグレーヴ広場[三一]に違いない。ここでエスメラルダ[三二]が縛り首にされたのが、下からでもはっきりと感じられるぞ。（余談だが、このような作品を書く者は[三三]二度とあるまい、――グツコー[三四]やラウベ[三五]にすら無理だ）だが、とりとめもないことを言っている場合ではない！　わが使命は、わたし自身がまったく神聖であるように、神聖なものなのだ。（さらに身を乗り出して周囲を見回す）うん――しかし、ここはどこなのだ？　頭の上にあるのはなんだ？　絞首台ではないか？　いや、おそらく断頭台、もしかしたら聖なるギロチンか？　――うーん！　ここはグレーヴ広場なのかな？　いや、いや！　――わたしがよく知らないだけだ。市庁舎はもっと高い建物ではなかったかな？

下からのくぐもった声　（伝声管を通して）ヴィクトル！　ヴィクトル！
われらの側につけ！

ユゴー　おや！　なんだ？　下水道の中からわたしを呼んでいるのか？
（頭を後方に回し、下に向かって）下にいるのは誰だ？
声　われわれだ！　一人ともう一人！　正真正銘パリの守護霊だ！
ユゴー　ほんとうか？　――たしかに、諸君の含み声には好感がもてる！　だが、名はなんというのだ？
一人の声　フルーランス、おまえが言え！
フルーランスの声　（下から）ヴィクトル！　ヴィクトル！　よく聞け！　われわれの側につけ！　外気を避けるんだ、欺瞞の魔物たちに支配されているからな！　われわれのもとにとどまれ。われわれはパリのはらわただ。食い物もあるぞ！
ユゴー　ああ、体が裂ける！　わが身を二つに分割できればいいのに！
（軍楽の陽気な行進曲が前景に近づいてくる）聴け！　ラ・マルセイエーズではないか？
フルーランスの声　きみになんの関係があるのだ？　ばか者どもはほっとけ！
ユゴー　ああ、歓喜の響き！　音楽は苦手だが、ラ・マルセイエーズなら四マイル離れていてもわかるぞ！　行かねば、上がって行かねば！
二人の声　こっちに降りて来い！　まだそのときではない！
ユゴー　わかったよ！　たしかに！　はらわたたる諸君の側につくとしよう！　ただ、久しく耳にしていなかった勇敢な響きに、まず耳を傾けさせてくれ！
国防軍のコロス
（陽気な音楽隊とともに登場。以下の歌をうたいながら共和国の祭壇の周囲を行進する。[三六]）
共和国！　共和国！　共和国！　国　国！
共和　共和　共和　国　国！　等々
共和　和　和　和和　和和　和国！　等々[三七]

モテュー　止マレ（アルト）――ストラスブール讃歌（オマージュ　アー　ストラスブール）！
（コロスはストラスブールの彫像に向かって大きく旋回する。）
ユゴー　（好奇の目で追いながら）ああ！　この古式の風習には高貴な意義があるではないか！
モテュー　捧ゲー銃（プレザンテ　ラルム）ッ！　――讃歌（ウエ）ヲ歌ウアルザス人（ラルザシアン）ハドコダ？　ストラスブール　シャンテ　リムヌ？
ケラー（伍長）　ここです！
モテュー　前ニ（アヴァン）出ロ（セ）！　歌エ（シャンテ）！
ケラー　（前に出て、アルザス方言[三八]で歌う。）
「おお　ストラスブール、おお　ストラスブール、うるわしの町よ！」
等々[三九]
（この間、コロスは彫像の前を分列行進する。兵士はそれぞれ銃身から花束を引き出し、優雅な身振りで彫像の膝元に投げる。）
モテュー　今度（アプレザン）ハ、誓（ジュレ）エ！
ケラー　シュレはおりません！
モテュー　アルザス野郎（ベト　ダルザシアン）め！　――宣誓（ル　ジュルマン）ダ！[四〇]
ケラー　呪われちまえ――こん畜生――ばかたれ――糞ったれ！
ユゴー　（先と同様に）ああ！　ロマン主義が恐ろしい古典性に光明を与えている！
モテュー　復唱（レペトン）！
コロス　（やっとの思いで、顔をしかめながら）
「呪われちまえ――こん畜生――ばかたれ――糞ったれ！」
モテュー　よし（ビヤン）！　隊列（セレ）を詰（ヴォラン）めろ！　メース（マルション　シュル　メース）へ行進！
コロス　（メースの彫像の前まで行進し、そこで先と同様に分列行進し花束を置く。）
モテュー　ロレーヌ（ウエ　ル）人はどこ（ロラン）だ？
ケラー　（隊列に向かって叫ぶ）ディーデンホーファー、出て来い！
ディーデンホーファー　ここです！

モテュー　ティオンヴィリエ[四一]！　ロレーヌ語デ誓エ！
ディーデンホーファー　こん畜生――糞ったれ――ばかたれ――べらぼうめ！
ユゴー　（頭を引っ込めて）ああ、こいつはやりすぎだ！
モテュー　復唱！
コロス　（先と同様、悪態を繰り返す。）
モテュー　共和国市民タル擲弾兵諸君！　――タッタイマ誓ッタコトヲ、心ニシカト刻ミツケテオクノダ。スナワチ、コノ二ツノ町ヲ、諸君ノ血ノ最後ノ一適マデ絞ッテ守リ抜クコト、ソシテ、野蛮ナ敵ニソコノ石一個タリトモ持チ去ルコトヲ、決シテ許シテハナラナイ[四二]トイウコトダ！
ディーデンホーファー　歌もうたいましょうか？
モテュー　クダラン歌ハモウタクサンダ！　状況ハキワメテ深刻デアル。――共和国ノ祭壇ノ回リデ踊ロウデハナイカ！
コロス　（再び共和国の祭壇まで行進し、その周囲で戦闘的な輪舞を踊るが、ところどころ力のこもった個所になると踊りを中断してカンカン式に脚を振り上げる。）
「共和国！　共和国！　共和国――国――国！」等々
モテュー　気ヲツケ！　――サテ、作戦会議ヲ始メヨウ！
ケラー　（方言で）　共和国民諸君[四四]！　もっと明晰な言語を提案する！　ヨーロッパ中がわれわれに注目していることを、やはり考慮すべきだろう。ともかく芝居を演じるからには、とくにドイツの観客に注意を払うべきだろう。彼らには、ここでの成り行きと、とりわけ、われわれアルザス人が真の熱烈なフランス人であることを、ほんとうに理解できるようにしてやらなければならないのだ！
近衛兵ルフェーヴル　ワカッテルサ！　実際、われわれはドイツの観客の前で演じているのだ。
近衛兵ドルフース　オレナンカ、モウドイツ語ナンテしゃべれナイゾ！[四五]
ディーデンホーファー　なんとかなるさ！
モテュー　結構！　結構！　――ドイツの観客に向けてだ！[四六]
ユゴー　（先と同様に）ああ！　胸が張り裂ける！　いまこそ飛び出して、全員を熱狂させるなら、わたしは、なんと壮大な舞台に立つことになるだろう！
コロス　なんの声だ？　――ほら、下水道から呼び声がするぞ！
ユゴー　（身を乗り出して）気づいてくれ！　――わたしだ――ヴィクトルだ――ヴィクトルだ――
二人の声　（下から）やめろ！　出るんじゃない！
ユゴー　ああ、天命だ！
コロス　スパイだ！
ユゴー　諸君には、この並はずれた頭がもっとましなものに見えないのか？　この額が？　――この巨人が？　――このプロメテウスが？　諸君が浅薄な言行に堕しているあいだに、驚くべき小説をいくつも書いていたんだぞ。
二人の声　（下から）向こう見ずな！　降りて来い！
ペラン（少尉）　あっ！　この鼻は！　知ってるぞ！
ユゴー　（下からの呼び声に抵抗しながら）独裁者を罰したのは誰だ？[四七]　トロープマンの化けの皮を剥いだのは誰だ？[四八]　諸君がいま共和国の祭壇の前で踊っているように、まだこぞってあの男[四九]の前で踊っているあいだに、わたしは大洋の島[五〇]にいて深海の怪物[五一]を発見したのだ。諸君が野蛮人どもから兵糧攻めにされているあいだに、わたしは大胆にも下水道を這い回って諸君のところにたどり着き、食料を嗅ぎつけたのだ。まだわたしが分からないのか？　――（背後を振り返りながら）ああ、そんなに上着の裾を引っ張らないでくれよ！
二人の声　（下から）降りて来い！　きみはわれわれのものだ！

ペラン　市民諸君！　これは悪魔かヴィクトル・ユゴーその人だぞ！
コロス　（歓呼をあげて）ユゴー！　ユゴー！　――穴から出て来い！
フルーランス　（下から）それ、引っ張ってみろ！　われわれはしっかりと押さえているからな！
ユゴー　（背後を振り返って）血も涙もない鬼め！　ちょっとだけ質問させてくれ。
二人の声　（下から）急ぐんだぞ！
ユゴー　おお　友よ！　わたしはまだ下で重要な仕事があるのだ。また来るから、あてにしていてくれ。たぶん強力無比な助っ人を連れてくるぞ。――ただ、わたしが頭を悩ませていることについて手短に教えてくれ。ここではどんな変動が起きたのだ？　どうして市庁舎はバルコニーしか残っていないんだ？
ルフェーヴル　政府の連中がわれわれの前から姿を隠さないようにするためだ。われわれが政権を交替しようとするたびに、やつらは遠く離れた上の階に隠れてしまうから取り壊したのだ。
ユゴー　では、政府はどこで仕事をしているのだ？
二人の声　（下から）ワッ　ハッ　ハ！
ルフェーヴル　あそこのバルコニーだが、連中はその下で寝ている――
ユゴー　それじゃ、彼らはいま寝ているのか？　姿が見えないが。
二人の声　（下から）おしゃべりめ！　さあ、降りて来るんだ！
ルフェーヴル　いま起こしてやろう！
モテュー　起きろ！　起床！
ユゴー　ああ！　なんたる政府だ！
フルーランスの声　やつらはわれわれが起こしてみせる！　だが、もうこれまでだ！　降りて来い！　降りて来い！
コロス
見ろ、彼がもがくさまを！　下から引っ張られている！
上がって来い！　上がって来い！　彼をしっかり捕まえろ！
ユゴー
ああ、引き裂かれる！
偉大であるとは、なんたる呪い！
（コロスは、下から足をつかまれているユゴーの頭を引っ張る。彼の身体はゴムのように異常に長く伸びる。）
コロス
捕まえたぞ！　そら！　もう出てきた！
上がって来い！　上がって来い！　しっかり捕まえろ！
二人の声　（下から）放さんぞ！　降りて来い！　降りて来い！
（ユゴーの身体はコロスによってすでに極端な長さまで引き伸ばされたが、突然もとの長さに収縮し、奈落へと引き込まれる。）
コロス　（ぎょっとして立ちすくんだのち）
彼は去った！　下へと！　われらは彼を止められなかった！
われらは彼を引き伸ばし　われらは彼を引っ張った
だが彼は　ふたたびパチンと縮んでしまった
ヴィクトルは悪魔に攫われたのか？
ディーデンホーファー　じつに不快な光景だった！
モテュー　静粛ニ！　――真の無神論者たる者は、こんなことで動揺してはならん。われわれはすべての秩序をすぐに回復したいのだ。――だが、いまは政府の目を覚ませてやれ！　今日はまだ砲声がしないとは、けしからんな。では呼び声をあげよ。
コロス　（軍隊的なリズムの力強い身振りで）
政府よ　政府よ！　どこに隠れてる？
いつになったら敵を叩きのめすんだ？
どこで夢見ているのか　ジュールたち？[五二]　何をしている　ガンベッタ？

歩調をとらせてやろうじゃないか　軍隊式の急テンポ（ストレッタ）

進メ（アナヴァン）　ピカール！[五三]　進メ（アナヴァン）　ロシュフォール！[五四]

フルーランスとメジー　さもないと　きみらの横っ面をひっぱたくぞ！

カンカルの岩[五五]に座っているんじゃあるまいな

「飢餓（タンタル）の責め」に苦しむパリをよそにして？

トロシュ将軍！[五六]　漕役囚（ガレリアン）よ！

なぜぶっぱなさないんだ　ヴァレリアン[五七]から？

われらは勇敢で血に飢えてはいるが

われらに効くのは砲撃だ！

砲撃　砲撃　砲撃せよ！

政府よ（グヴェルヌマン）　われらにもう叫ばせるな！

政府よ（グヴェルヌマン）！　砲撃（ボンバルドマン）だ！

砲撃（ボンバルドマン）だ！　政府よ（グヴェルヌマン）！

政府よ（グヴェルヌマン）！　政府よ（グヴェルヌマン）！　政府よ（グヴェルヌマン）！　――さあ（マン）――さあ（マン）！

（緑色のデスクを囲んだ政府のメンバーがバルコニー上にせり上がってくる。――ジュール・シモンは書き物をし、ジュール・ファーヴルとジュール・フェリーは立ち上がる。二人は強く抱き合い、感激をパントマイムで表現する。）

コロス　（全員が入り乱れて）　ああ！　ああ！　政府の連中だ！

――三人のジュールだ！　――二人は抱き合ってるぞ！　――そう、愛し合っているんだ！　――感動的だなあ！　――泣きたくなるぞ！

ジュール・フェリー　市民諸君！　見たまえ！　愛と互いの尊敬を標榜する共和国だ！

コロス　（数人ずつ口々に）ほんとうだ！　実に美しい！　――さあ！

みんなで泣こうではないか！

「下水口を開けろ――」

二人の声　（下から、荒々しく早口で）いや、いまはまだだめだ！

コロス　「涙を流せ」

二人の声　（下から）それでよし！　――ワッ　ハッ　ハ！

フェリー　市民諸君！　わたしたちをいたわってくれ！　とりわけジュール第一号[五八]を。この男は疲労困憊しているのだ。

モテュー　われわれが話を聞きたいのは、まさにファーヴルなのだ！

ケラー　それより、すぐに砲撃だ！

ドルフース　黙ッテロ（トレゼヴー）！　ばかめ！

ルフェーヴル　静粛ニ（シランス）！　政府に発言させてくれたまえ！　――新たな動きはあったか？

ジュール・フェリー　おお　市民諸君！　友よ！　兄弟よ！　――ジュール第一号（プルミエ）に同情してくれ。わたしは第二号（スゴン）として喜んでこの男のかたわらに立つとしよう。

ジュール・シモン　（書き物から顔を上げて）わたしはやっと第三号ということか？

ペラン　ユリウス家[五九]のご両人！　喧嘩はよしたまえ！

ドルフース　喧嘩（バドゥ）ハヨシタマエ（ディスコルド）！

ケラー　黙っとけ！

ディーデンホーファー　あいつはいつも何を書いているんだ？

ジュール・フェリー　こらえてくれ、市民殿！　この男は文化事業[六〇]のことが心配で、少し気が立っている。いままさに、きわめて重要な決断を目前にしているのだ。

モテュー　この人には、わたしが委託した布告を起草してもらいたい！

――市民殿、よろしいか、わたしは無神論を提案する。

ジュール・シモン　（頭を横に振って書き続ける。）

モテュー　頭を振ったって、なんにもならん！　布告が欲しいのだ！

――わが大隊では、すでに無神論を導入しておる。これこそが共和国を救うために最も必要な措置なのだ。

ジュール・フェリー　市民殿！　それには反対意見を表明しなければならん。それはまったくモラルに反するではないか。――文化事業に関するわが同僚の見解はいかがかな？

ジュール・シモン　フェリー、わたしの大事な仕事をいつも邪魔しているのは貴公だぞ！　しゃべっているがいい！　わたしには別の仕事があるんだ！

モテュー　わたしは決議文を求めているのだ！　ファーヴル、貴殿の発言を求める！

フェリー　だが市民殿、この偉大なるジュールがどんなに痛ましい状態にあるかが見えないのかね？　ビスマルクとの名高い会談[六一]で、この男はすっかり声がつぶれてしまったのだ。おまけに、あの野蛮人の恥知らずな要求が原因で、むせび泣き、はらわたが煮えくり返っているのだ。

コロス　（激情を爆発させて）

恥知らず！　この上ない恥知らず！

ああ　大砲の轟きが聞けたらなあ！

砲撃！　砲撃！　砲撃だ！

それとも、シモンがあそこで書きなぐっているものを読むがよい！

フェリー　市民諸君！　政府はファーヴルの神経をいたわってくれと頼んでいるんだ！

ディーデンホーファー　わかった、お気の毒に思うとも！

モテュー　いたわる必要などない！　わたしは何よりも無神論の布告が欲しいのだ！　貴殿たちはわたしから逃げられやしないのだ、コン畜（サクレ ソンドゥ）――失礼！

フェリー　（ジュール・シモンに）文化事業とはなんのことだ？　うまくいくのかね？

シモン　糞（サプリスティ）ッ！　静かに書かせてくれたまえ！　ところで、わたしが思うに、神は安泰であり続ける。あの男が磔刑像の撤去を要求しても――わたしにとって、磔刑像など問題ではない。

フェリー　聞け、偉大なるジュールがすすり泣いているぞ！　痙攣している！　――地団太を踏んでいる！　――（傍白）さあ、気力を出そう！――（大声で）市民モテュー君、わたしはきみを突き動かしている破壊的な精神に断固として抵抗する。かの聖なるロベスピエールにしても神の存在を布告したのではなかったかな？　であれば、あらためてそれを布告しようではないか。

コロス　そうだ　そうだ！　市民モテュー殿、お静かに！

ユゴー　（地下からの声）いまこそ上がっていかねば！

二人の声　（下から）くだらんことに口を出すな！

モテュー　だが、結局のところ、われらは文化事業について何を知ることになるのだ？

コロス　見ろ！　あの男は署名しているぞ！　紙を破り取っている。

シモン　（文書を持って立ち上がる）ペラン殿（ムッシュ ペラン）！

ペラン　ここです！

シモン　指令を受け取りにきたまえ！

（ペランは階段を上って、シモンの文書を受け取る。）

コロス

見ろ　市民ペランが

上がっていくぞ階段（ペロン）を

階段（ペロン）　ペラン

葦笛（ミルリトン）――トン――トン！

われらは　どんなプロン[六二]よりもそれがほしい――プロン――プロン！

ペラン　（読み上げる。）

教育省（ミニストル デュ キュルト）は、これよりオペラの上演を再開することを決定した！

コロス　ブラヴォー！　ブラヴォー！　アンコール（ビス）！　アンコール（ビス）！

ペラン　諸君、これはわが政治的眼力のなせるわざであるぞ。かくして共和国を救済しようではないか！

モテュー　無神論のほうが救済になっただろうに！

ペラン　いや、オペラがそれに勝る。

コロス　ブラヴォー！　ブラヴォー！　アンコール！　アンコール！

フェリー　（芝居がかった口調で）見たまえ！　偉大なるジュールが地団太を踏んでむせび泣いている！　――（ファーヴルの口元で聞き耳を立てる）おお、市民諸君！　――ファーヴルは抗議している。オペラを放棄するよう、諸君に願っているのだ。オペラは軽薄すぎるのだと！　――シモン殿、貴殿は何をしたのかね？　無神論についても同じように署名できたかね？

ドルフース　オレガ考エテイルノハ、コノコトダ！

シモン　たぶんそんなに危険ではないだろうからな！

フェリー　市民諸君！　考えてもみたまえ！　劇場は明け渡されて、野戦病院になっているのだ！――

ルフェーヴル　それなら病人も楽しませるというわけだ！

コロス　治療になるだろう！

フェリー　ガスを節約しなければならん！

コロス　だったら油を燃やせ！

「ランプダ！　ランプダ！」

フェリー　（絶えずファーヴルから小声で教えられて）だが、軽薄な衣装は？あらわな首筋は？　――最大の試練を受けている共和国がそんな姿を見せるなら、ヨーロッパはなんと言うだろうか？

ルフェーヴル　魅了されて、共和国を救ってくれるだろう。幾多の軍勢がやってきてプロイセン軍を追い払い、いよいよもって共和国に忠誠を誓うだろう。

ドルフース　悪クナイ！

ペラン　市民諸君！　打開案があるぞ！　黒のフロックコートと仔山羊の手袋を着けたロベール[六三]とテル[六四]を上演するのだ。

コロス　（数人で）ご婦人方もフロックコート姿か？　それなら、われらは反対しない。

（ファーヴルは地団太を踏む。）

フェリー　だめだ！　それでは女性の尊厳に反することになるだろう！

ペラン　市民諸君！　聞いてくれ！　オペラを救うんだ。そうすれば共和国を救うことになる！　この高い目標のために犠牲を払い、ご婦人方には、きちんとした黒いドレスを着て歩いてもらうのだ。首のところまでボタンをかけてな！

コロス　（腹立たしげに）あーあ！　あーあ！　ちぇっ！

ケラー　それじゃあ、フランス人である意味がない！

フェリー　（先と同様に）偉大なるジュールは満足しているぞ！

シモン　したいようにするがよい。だが、それでは共和国は救えないぞ。そんな黒ずくめのオペラを灯油ランプの明かりで上演したところで、どんな大国も支持してはくれないだろう。せいぜいスイスか教皇くらいなものだ。

モテュー　無神論を導入しろ、そうすればガリバルディ[六五]が敬虔主義[六六]のプロイセン軍をすっかり平らげてくれるぞ！

ルフェーヴル　うーん、だが、まずは黒フロック・オペラをやってみよう！　――ロッシーニとマイアベーア、ちょっとしたものじゃないか！

ペラン　わたしの計画は出来上がっている。ただ、政府に出演者を調達してもらわなければならない。みんな軍隊に行ってしまったのだ。テノール、バリトン、バス、合唱団、全員がストラスブールとメースで戦っているか、野営地や防塁の上にいる。歌姫たちとバレエの

踊り子は女傑（アマゾン）合唱団を結成してスダンを守備している。政府は彼ら全員の兵役を免じて、大急ぎでパリに送還してもらいたい。

コロス　さあ！　さあ！　彼らを呼び寄せなければ！

（ファーヴルはむせび泣く。）

フェリー　市民諸君！　どうすればできるだろうか？　われわれは包囲されているのだ。

コロス　出撃しよう！　――砲撃だ！　トロシュ！　トロシュ！　なぜ砲撃しないのだ？

ルフェーヴル　目先の利かないトロシュめ！　わが最強の軍団をパリから送り出してしまうとは！

コロス　裏切りだ！　裏切りだ！　――歌手たちを呼び寄せろ！　われらはオペラが、そして何よりもバレエがほしいのだ！

フェリー　（やけを起こして）誰か空を飛ばないか？

ナダール　（政府のデスクの下から這い出ながら）わたしが！

（彼はぞっとするような被り物で身を隠しているが、あとでそれは気球であることが判明する。そこから頭だけを出して外を見る。――だれもが愕然とする。ファーヴルは気絶し、ペランは脱兎のごとくオルケストラに退き、コロスはおずおずと祭壇の周囲に集まる。）

ユゴー　（プロンプター・ボックスの口から頭を突き出す）いまこそ、すべてを救うべきときだ！　――放せ！　行かねばならぬ！

二人の声　（下から）無理をするな！　――言うことを聞け！　ほんとうの役者を見つけに連れて行ってやるから！

（ユゴーは再び下に引き込まれる）

コロス　（恐怖で立ちすくんだのち）あの化け物はなんだ？

ナダール　（頭をぐらつかせ、白目をむき出して）わたしはナダール！　共和国の救い主だ！　――政府はわたしを参事官として採用されたい。そうすれば、わたしは空を飛んで、政府が望むところへ行こう！

ガンベッタ　（デスクの背後から躍り出てデスクを飛び越える）待て！　ここにわたしがいるぞ！　――夕べ、きみの夢を見たんだ！　ナダール、わたしこそきみの求める男だ！　――市民諸君、こいつを膨らませろ！

（彼はデスクの下から巨大なふいごを引っ張り出す。）

フェリー　ファーヴルは驚いているのか？　――シモンはペンを噛んでいるのか？　――ガンベッタはどえらい男じゃないか！

ガンベッタ　さあ、市民諸君！　それっ！　みんな仕事にかかるんだ！　――ナダールにはとくに注意しろよ、さもないとこの男は諸君の写真を撮り始めるぞ。

コロス　何をすればいいんだ？

ガンベッタ　ナダールを共和国の祭壇に載せてやれ！

（コロスはナダールをバルコニーから降ろし、手渡しで祭壇の上に載せて直立させる。ふいごが口金に接続される。コロスは軍隊式に分列し、音楽の拍子に合わせてふいごを動かす。）

ガンベッタ

そーら　吹け！　吹け！　市民たち
ナダールが　たっぷり膨れるまで
身体のなかでは　もうガスが　明るく燃えている！
いいか　こいつにとっちゃ　これは　ただの暇つぶし！

コロス　（働きながら）

空気よ！　空気よ！　天の子よ！
もうナダールは　パリの風で　膨れてる！
光を使って（六七）――
書いたよ彼は　われらの顔を
空中で
いま彼が　やっているのは　電信だ

（気球は完全に膨らむ。ナダールの頭は上方に隠れ、いま下をのぞき込んでいる。）

ナダール　ゴンドラを！　ゴンドラを！

ガンベッタ　ゴンドラはどこだ？

ナダール　わたしが飛んで行かないように、ロープを張ってしっかりつかませるんだ。ゴンドラはすぐにできる。そいつには共和国の紋章がうってつけだ。ここだ！　ここだ！　――（彼は上半身を乗り出して、祭壇の上のジャコバン党の帽子を途方もなく長く引き伸ばし、束桿の棒をばらばらにして、手品師のように巧みな手つきで素早く小さなゴンドラを組み立て、ひもで気球に結びつける）斧はもらっておく。まずいことになったら、ロープを切るのに使うから。

コロス

おお　発明の才よ！　発明の才よ！

なんと素早く　打開策を見つけることか

ナダール！　ナダール！

自由の鷲よ！

おまえは共和国を　ゴンドラ（ゴンデル）に仕立てた！

これに比べりゃアメリカの　金髪娘（ブロンデル）など価値はない！

ナダール　よかろう（オールライト）――ガンベッタ！　――乗りたまえ！

（ガンベッタは乗り込む。）

コロス

さあ！　勇気凛々！

出発（アンルート）だ！　出発（アンルート）だ！

ガンベッタ　市民諸君！

ナダール　まだ早い！　もうちょっと上がってからだ！　――ロープをゆるめろ！　――（気球は半分の高さまで上昇する）さあ！　これでよし！　――ヨーロッパがわれわれを見上げていると、つねに心得よ！　――（頭を引っ込めて気球の中に姿を消す。）

コロス

ああ！　神々しい！　崇高だ！

オペラにも取り入れねば！

（ペランはこれをメモする。）

ガンベッタ　（歌う）

「世界から自由が消えた

残るは主人と従者のみ！」

（語る）いまは専制に服従し、その荒くれた軍勢によって侵略を行っている国の国民的な詩人[六八]が、かつてこう歌ったものだ。しかるに、（歌う）

「彼らに渡してなるものか

自由なドイツのラインを！」

（語る）と、熱狂的なガリアの歌人[六九]がそれに答えているのだ。だからこそ、おお市民諸君、わたしは踏みにじられた地上を去り、空中に上がったのだ。では、わたしの空中演説に耳を傾けてくれたまえ。市民諸君、空を信頼するがよい。諸君の救いは風に乗ってやってくるのだ。ちょっとだけ待ってくれ。そうすれば、わたしはライン河に接近してプロイセンとヨーロッパを仰天させ、ストラスブールとメースの守備隊を輝かしい勝利に導き、スダンでトロープマン[七〇]をつかまえて、そして――

ペラン　オペラ要員を連れてこい！

コロス　そうだ、それが肝心だ！

ガンベッタ　ナダール、もっと低く！　――下の連中にはわたしの言葉がちゃんと聞こえていない。

ナダールの声　逆だ。上昇すれば、もっとよく聞き取れるだろう！

――（外をのぞいて）ロープを放せ！

（コロスがロープを放すと、気球は書き割りの空まで上昇する。歓呼が上がる。）

ガンベッタ　（叫んで）市民諸君、さらばだ！　――わたしは共和国の船に乗っているのだ！　――（ナダールに）メガホンはどこだ？

（ナダールはメガホンを取り出して手渡す）さあ！　（メガホンを口に当て）わたしは共和国の船に乗っているのだ。ただ勝利者としてのみ、わたしは空の大海から帰ってくる、地上に再び帰ったとき、わたしが踏むのは旧体制（アンシャンレジーム）の瓦礫だけなのだ！　――さらば（アディユー）！

ディーデンホーファー　なんと言ってるんだ？

ルフェーヴル　あの男はバレエ団を連れてでなければ帰らないつもりだ！

コロス

ガンベッタにナダールよ！
幸いなるかな二人組！
乗っているのは　空飛ぶ輜重（エキパージュ）
われらが願うは　よい旅（ボン）だ！（ヴァイヤージュ）
崇高なる　政府（グヴェルヌマン）
元気に飛べよ　風に乗れ！（ヴォロヴァン）
政府！（グヴェルヌマン）　政府！（グヴェルヌマン）
風に乗れ！（ヴォロヴァン）　風に乗れ！（ヴォロヴァン）

（ジュール・ファーヴルとフェリーは抱き合い、シモンは書いている。――気球は舞台の上をさらに漂い、そしてノートル・ダムの先端に引っかかって動かなくなる。）

ガンベッタ　引っかかったぞ！

コロス　引っかかったぞ。鐘つき男（七一）が彼らをつかまえているぞ！

ナダール　（外をのぞき、ひもを操作する）いいからしゃべり続けろ！

ガンベッタ　だが、いったい何を？　――何も見えんじゃないか！

ナダール　（ガンベッタに巨大なオペラグラスを手渡す）これで見て、見えているものを話すんだ！　あっちに向けろ、ほら、ストラスブールだ！（彼はガンベッタをストラスブールの彫像の方向に向ける。）

ガンベッタ　（オペラグラスで眺めながら、メガホンを口に当てる）ああ！……

コロス　ああ！　……

ガンベッタ　ストラスブールだ！

コロス　ストラスブールだ！

ガンベッタ　すっかり花で飾られている！　大いなる喜びの祭りだ！　プロイセン兵はもう一人も見えない！　わが軍は上機嫌で、パリにいるときのように陽気だ！

コロス　（有頂天になって踊る）

「おお　ストラスブール、おお　ストラスブール、うるわしの町よ！」

等々

ガンベッタ　軍勢はストラスブール讃歌（ストラスブルジョワーズ）をうたい、踊っている。（ファーヴルとフェリーが抱き合う）知事と市長が抱き合っている。（ジュール・シモンが書き物をしている）副官が戦勝報告書を書いているぞ！　――（大歓声）歓声が高まっている！

ペラン　これはわたしの合唱団だ、わたしの役者たちだ！

コロス　（叫んで）役者たちを呼び戻せ！　――風よ！　風よ！　われらはオペラを手に入れるのだ！

ナダール　（引っかかっていた気球を解き放して）気をつけろ！　（頭を引っ込める。）

ガンベッタ　（よろける）おい！　危なくオペラグラスとメガホンをなくすところだったぞ！　――なんでそんなに押すんだ？

ナダールの声　落ち着け！　喧嘩はなしだ！　さもないと降りてもらうぞ！

（気球は少し飛ぶとパンテオンの先端に引っかかる。）

ガンベッタ　おっと、また引っかかったぞ！
コロス
　彼らは空の巣に引っかかった
　すべての神々[七二]につかまった！
ナダール　（再度ひもを操作する）眺めてしゃべれ！
コロス　眺めているぞ！　ガンベッタ、今度は何が見える？
ガンベッタ　（先と同様に、オペラグラスをメースの影像に向けて）ああ！
　メースが見える！
コロス　ああ！
ガンベッタ　すっかり花束で覆われている！
ペラン　本物のバレエ衣装だ。
ディーデンホーファー
　「おお　かわいい町よ！　わがメースよ！　おまえはなんと愛らしいことか！」
コロス　進メ！　行進ダ！[マルション]　――オペラへ　バレエへ！
ガンベッタ　軍勢がすさまじい歓声を上げているぞ！　バゼーヌ[アナヴァン]が参謀長と共和国の祭壇の周りで踊っている！　――彼はわれわれを認知したぞ！
ペラン　ああ！　そこにはわたしの踊り子たちもいるのだ！
ガンベッタ　プロイセン兵はもう一人も見えない！　すっかり追い払われたのだ！　――（ファーヴルとフェリーが抱き合い、シモンが書き物をしている）知事と市長が抱き合っている。副官が戦勝報告書を書いているぞ！　――（コロスのすさまじい歓呼）歓呼がますます高まっている！
ペラン　おお！　オペラの連中なら顔なじみだ！
コロス　（叫んで）風に乗って！　風に乗って！　バレエよ来い！
ナダール　（気球を再び解き放して）ガンベッタ、しっかりつかまってろ！
ガンベッタ　どこへ行くんだ？
ナダール　空だ！　（頭を引っ込める）
（気球はしばらくのあいだふらふらと漂ってからオルケストラを越え、コロスの頭上を越えて、さらに観客の上を可能な限り遠くまで飛ぶ。）
コロス　（気球のあとを追いながら）
　狂喜のガンベッタよ！
　歓喜のトランペットよ！
　おお　空中の帆船乗りよ！
　一緒に乗りたいものだなあ！
　おまえには彼らの踊りが見える　彼らの歌が聞こえる
　ああ　彼らをすぐに砦から連れてきてくれよ！
ガンベッタ　（気球の中のナダールに）ここはどこだ？
ナダールの声　自分で見ろ！
ガンベッタ　目が回る！
ナダールの声　なら、回しとけ！
コロス
　おお　目を回せ　ガンベッタ！　もっともっと目を回せ！
　言ってくれ　野蛮人の兵どもはまだいくらか見えるのか？
ガンベッタ　（ナダールがオペラグラスを観客のほうへ向けてやると）ああ！
コロス　ああ！
ガンベッタ　たくさんいるぞ！　ひしめき合っている！　だが、敵はいない！　――いないぞ！　味方しかいない！　――みんなわれわれに向かって歓声を上げている！　ああ！　全員の見分けがついたぞ！　わが同盟軍だ！
コロス　どうだ、ガリバルディはもうパリ目前か？
ガンベッタ　ガリバルディなど問題にならん！　全ヨーロッパが介入

し、喜んでわがほうに押し寄せてきたのだ！　――そら、イングランドが見える。貴族も民衆も！　――ほら、ロシアだ、ポーランドにクロアチアだ！　――あそこにはスペイン人、ポルトガル人、それにユダヤ人だ！

コロス　で、ドイツ人は？

ガンベッタ　真ん中でおとなしく座っている。降伏して、またわれらの劇場に行けるので至福の気分なのだ！

コロス　（すさまじい歓声をあげて）

砲撃しろ！　砲撃だ！

砲撃はいつだ？

コン畜生メ！

いつ砲撃するんだ　トルシューは？

（観客のあいだで盛大な喝采。ファーヴルとフェリーは抱き合う。）

ペラン　ああ！　この耳になじんだ喝采の嵐！　――だが、オペラの連中はまだ来ない。どうやってオペラを始めたらいいんだ、どうやってバレエを踊らせたらいいんだ？

コロス

嘆かわしい！　死ぬほど恥ずかしい！

ヨーロッパ中が観客となって来たのだ！

劇場の鼻息が聞こえるのに

相変わらずオペラが欠けている！

ペラン！　ペラン！　オペラを呼んでこい！

さもないと政府を打ちのめすぞ！

ペラン　市民諸君、わたしに魔術は使えない！　政府の側についてくれたまえ！わたしは気球の中に隠れてはいない！

フェリー　ことは深刻になるぞ！　――（両手をメガホンにして）おーい！　ガンベッタ！　――役者は調達できないか？

ガンベッタ　（再び舞台のほうを向いて）おお！　見えるのは役者ばかりだ！

コロス　だが、衣装はどうする？　ちゃんとした衣装は？

ガンベッタ　（ナダールに）ナダール！　何か策はないか？

ナダール　（外をのぞいて）ほら、気をつけろ！　針路ひもを垂直にしろ、そうしないとまた教会に引っかかるぞ！　書き割りの裏だ！

書き割りの裏だ！　――（気球は再び舞台の上を漂う。）

コロス

これで気球は正しい針路をとったのか？

書き割りの裏へ　針路をとれ！

ヒモ！　ヒモ！　ヒモヲ頼ミマス！

書き割り　衣装　そしてチェンデラテー！

（気球が背景であちらこちらへと漂い、ガンベッタがあちこち眺めているあいだに、地下で激しく沸き起こる唸り声とガチャガチャという音が聞こえてくる。）

地下の声

プンペルンプン！　プンプン！　ラッテラー！

「なんとかなるさ！　なんとかなるさ！　なんとかなるさ！

貴族ヨ！　――族！　族！

勇気ダ！　進メ！　ネズミよ！　ネズミ！

ネズミよ！　ネズミ！　プンプン！　ラッテラー！

モテュー　裏切リダ！　武器をトレ、市民タチヨ！　――大隊ヲ組織セヨ！

コロス　（隊列を組みながら）武器をトレ！　武器をトレ！

フルーランスの声　（下から命令する）進め！　退くな！　――破壁器、前へ！

（頭に二本の牡山羊の角をつけたヴィクトル・ユゴーが、プロンプター・ボックスの口から押し出される。彼は甲冑に締めつけられて完全に硬直している。）

ユゴー　災イダ！　災イダ！　裏切リダ！　裏切リダ！
コロス　（飛び退いて）ヴィクトル、ここで何をしているんだ、悪フザケカ？
ユゴー
「諸君ヲ救ウタメニ
フランスガワタシヲ武装サセタノダ！」
文明の逸脱者の
武器と甲冑で！
フルーランスの声　進め！　しゃべるな！　――用意！　――そーれ！
突撃！
（ユゴーは機械仕掛けのように一気に突き出され、数歩前進する。再び接近していたコロスは、散り散りになる。ユゴーは地面に腹ばいになったまま動かない。フルーランスとメジーと一群のアルジェリア狙撃兵［ジャコバン党員の服装で］が、続いてプロンプター・ボックスの口から押し寄せる。）
コロス　（驚愕して退く）赤い共和国だ！
フルーランス　赤などではない！　よく見ろ！　われわれは黒い共和国なのだ！
コロス　大変だ！　赤どころか黒だ！　誰カ助ケテクレ！　政府を救ってくれ！
（コロスは舞台中央に逃れ、バルコニーに通じる階段を占領する。――ファーヴルは気を失い、フェリーは彼を気遣う。シモンはペンを噛む。）
コロス　砲撃しろ！　砲撃だ！　いつになったら砲撃するんだ？
フルーランス　（手兵とともにオルケストラを占領しながら）メジー！　仕事だ！　手伝ってくれ、ヴィクトルを据えるんだ！　――（彼らはユゴーを祭壇まで引きずって行き、その上に直立させる。黒人たちがその周りで踊る）さあ始めろ、ヴィクトル！　とりかかれ！
ユゴー　（身じろぎもせず）
市民諸君！　だまされているぞ！
鼻面を引き回されているのだ！
諸君は信用ならぬ悪党に
根も葉もないことを　吹き込まれているのだ！
物の具に身を固め
感動とともに　わたしは
諸君に伝えよう
どこに罪が隠されているかを！
下水道の奥深く
われらは身を隠し
プロイセン軍にいたる
排水口を発見した
ストラスブールとメースは
敵に包囲されている
塁壁のなかを通り抜け　われらのもとへ
逃れてくるのは　ネズミだけなのだ！
コロス　（憤激して）なんだと！　ネズミか？　ネズミだと？　オペラもバレエもなしというわけか？
おお　ペテン師の　ガンベッタ！
ナダールと競って　うそをついたのだ！
砲撃しろ！　砲撃だ！
いつになったら砲撃するんだ？
フルーランス　わたしが手配した。ヴァレリアンは真っ黒だ！　さあ、外に出るんだ！
（背景に向かって黒旗で合図を送る。ただちに砲声が立て続けに鳴り始める。）
コロス
あっ！　大砲だ！

どうやって　これに報いようか？

ユゴー　さあ　市民諸君　勇気を出せ！　すべてがうまくいくぞ！

フルーランス　さあ、メジー！　黒人たちよ、立ち上がれ！　政府を打倒するんだ！（笛で合図をする）さあ、地下から出てこい！

地下からの声　チュー！　チュー！　チュー！　チュッチュッチュ！　等々

（プロンプター・ボックスの口から巨大なネズミたちが大急ぎで出てきて、大混乱のなかで左右に並ぶ。）

フルーランス　さあ、忠実なネズミたち！　――怖がらせてやるんだ！

（少尉のメジーとともに黒人たちを率いてバルコニーの攻撃にかかる。コロスは両側の彫像の方向に退却する。そこへネズミたちが襲いかかり、彫像によじ登って国防軍をオルケストラの前面まで追い払う。）

コロス　（祭壇に向かって）　ヴィクトル！　ヴィクトル！　お願いだ　ネズミの群れを　追っ払ってくれ！

（外では砲声が続いている。黒人たちがファーヴルとフェリーとシモンを捕まえる。）

フェリー　（両手をメガホンにして）ガンベッター！　ガンベッター！　助けてくれー！

ナダールの声　（空中で）いまいましい砲撃だ！　おれに当たったぞ！

（気球は舞台中央に向かってゆらゆらと漂う。ガンベッタは気球の主ロープをつかんでパンテオンに跳び移り、座りこむ。その間に気球は完全にしぼんで共和国の祭壇の上に落ち、ユゴーをすっぽりと覆う。――ネズミたちは彫像の上の花束をかじって飲み込む。コロスは驚愕する。）

フルーランス　進め！　かかれ、メジー！　政府を引きずりおろせ！

（彼らは三人を階段からオルケストラまで引きずり、プロンプター・ボックスの口から下に押し込む。）

ガンベッタ　（パンテオンの上からメガホンを使って）市民諸君！　フランス人よ！　わたしの側についてくれ！　わたしはこの塔にいて、諸君を救うと約束する！

フルーランス　おい！　いいから降りてこい！　ペテン師、道化、いんちきオペラグラスを持ちやがって！　――それ！　忠実な黒人たちよ、見張りに立って、三人のジュールが二度と這い上がってこないようにしろ。――（二人の黒人がプロンプター・ボックスの口の前で歩哨に立つ。）ヴィクトルのやつはどこへ行ったんだ？　どうやら、ナダールに窒息させられたようだな。かまわん！　さあ！　政府のデスクへ行こう！　――（部下たちとともにバルコニーを占拠する。）

コロス　おお　ヴィクトル！　なんと悲劇的な運命か！　共和国の祭壇で　息が詰まってしまうとは！　諸君は　何か　気づいたか？　いやなにおいが　しているぞ！　ナダールとヴィクトルが――彼らの血を混ぜてるぞ！

フルーランス　（バルコニーで）さあ、布告せよ！

メジー　布告せよ！

黒人たち　布告せよ！

コロス　われらは布告する！

フルーランス　無神論だ！

モテュー　いいぞ！

フルーランス　共産主義だ！

コロス　（むせび泣いて）ひゃーっ！

フルーランス　黒い共和国だ！

ガンベッタ　（先と同様に）ネズミの共和国だ！

コロス
　いや！　ネコの共和国だ！　ネコだ！　ネコだ！
　恐ろしいドブネズミが　われらを食らう！
（ネズミたちは彫像のあいだの空間を荒々しく行ったり来たりしている。）
　ガンベッタ！　ああ　最愛のガンベッタ！
　われらを助けるすべを知っているなら　助けてくれ！
ガンベッタ　（オペラグラスをネズミに向けてから）ほう！
コロス　ほう！
ガンベッタ　ああ！
コロス　ああ！
ガンベッタ　全員が助かったぞ！　すべての苦難が終わったのだ！
　――店を開けろ、カフェも、レストランもだ！　商売が景気づいている！　食糧が諸君のところにどっさり入ってきたぞ！
フルーランス　ペテン師め！　――町は飢えているんだ！
コロス　ちえっ！
ディーデンホーファー　ああ、メースの牡牛と羊さえ手に入ればなあ。
フルーランス　（ネズミを指して）ほら、あれを食え！　全部メース産だぞ！
ルフェーヴル　どんな味だろう？
ヴェフール　ネズミ・ソース、うまそうじゃないか！
コロス
　ソース添えネズミ！　ネズミ添えソース！
　腹が減って倒れる前に　持ってこい！
ガンベッタ　（先と同様に）祖国の未来を救え！　――共和国を救うのはマビール隊だけだ！
フルーランス　ほら吹きが！　黙らんか！　――マビール隊でも国民遊撃隊でもない！　諸君を救うのは恐怖と空腹だけなのだ！
ケラー　腹なら減ってるぞ！
ルフェーヴル　おまけに恐怖もだ！
コロス
　それなら　恐怖で癒してくれよ　空腹を！
　なんのために　長いこと　暇つぶしをしてたんだ！
　昼どきなのに　昼飯ゃまだだ！
　やい　そこの国民軍歩哨　立ちやがれ！
　ヴェフール　シュヴェ　ヴァシェット　来い！
　すぐに　ネズミの粥を給仕しろ！
（ヴェフールとシュヴェとヴァシェットは、たちまちコックに変身）
　屠殺屋はどこだ？　アルジェリア狙撃兵　仕事にかかれ！
　貴様らは　ソースなしでも　ネズミを喰らうだろ！
（黒人たちがネズミを捕まえにやってくる。ネズミたちは哀れな鳴き声を上げ、階段の上や彫像の上、オルケストラへと逃げ惑う。コロスは銃を下に向けてネズミを追い払う。アルジェリア狙撃兵がつねにそのあとをついて回る。）
ガンベッタ　（先と同様に）やめろ！　――わたしに見えるのはマビール・ダンスホールだ！　――諸君の喜びを食ってはならん！
フルーランス　この下種野郎！　――民衆の誘惑ばかりして、まるっきりトロープマン流だ！――捕まえろ、屠れ、喰らえ、――それでいいのだ。そうすりゃ、力もわいてくる！　――さあ、黒旗を立てろ！
（メジーがバルコニーに黒旗を立てる。騒ぎが頂点に達したとき、オッフェンバックのメロディを吹くトランペットの音がプロンプター・ボックスから聞こえてくる。二人の黒人が踊りだす。）
コロス　聞け！　あれは何だ？　軍使だぞ！
フェリーの声　（下から）進め！　オッフェンバック！　さあ、勇気を出せ！　――さあ、シモン、手伝ってくれ、こいつを押すんだ！
（オッフェンバックがトランペットを吹き続けながら、上半身を乗り出す。）

コロス
裏切りだ！　裏切リダ！（トライゾン）　プロイセン軍が密かに侵入してきたぞ！
武器を取れ！　武器ヲ取レ！（オザルム）　砲撃しろ！
（舞台上の憤激は次第にやわらぐ。ネズミを追うアルジェリア狙撃兵の動作はコントルダンスのようになる。オッフェンバックに向かって突進しようとした国防軍兵士たちは、オッフェンバックを撫でていた二人の黒人歩哨に押しとどめられる。）
フルーランス　これはなんだ？　裏切りだ！　プロイセン軍だ！　――メジー、逃げろ！　もうだめだ！
ガンベッタ　（先と同様に）共和国を救ってくれ！　――われらは負けた！
フルーランス　ペテン師め、上で楽な思いをしやがって！　――ナダールはどこだ？　――われわれも空に上がりたい！
ガンベッタ　ナダール！　だめだ、こっちに来い！
三人のジュールたち　（下で）
いいからやれ！　勇気を出すんだ！　もっと高らかに吹け！　あんたは、きっとナダールも膨らませられるぞ！
（オッフェンバックはますます美しい演奏を聞かせる。気球が膨らむ。コロスは鼻をつまむ。）
コロス
おお　崇高だ！　神々しい！　すばらしい！
ガスが　ちょっとばかり　臭いものの
ナダールは　さからうことなど　できはしまい
空へ昇って　行くしかないのだ！
（気球が静かに上昇する。ゴンドラには、フランスの守護神に変容したヴィクトル・ユゴーが座っている。――この間、三人のジュールは、トランペットを吹き続けるオッフェンバックを完全に上に押し上げ、肩にかついで共和国の祭壇に載せる。オッフェンバックは両脚をだらりと下げて、そこに座り続ける。）
フルーランス　見ろ、あの人でなしどもを、ジュールたちのことだ！
――やつらは降伏して、自分からプロイセン軍を連れてくるぞ！
――逃げろ！　逃げるんだ！　（彼らはバルコニーの背後に飛び降りる。）
フェリー　その告発は嘘だ！　――降伏なんかしていないぞ！　――われわれは、われわれに全ヨーロッパの調停を請け合う、世界一国際的な人物を連れてきてやったのだ！　この人物を自分の陣営に引き入れた者は永遠に無敵であり、全世界を味方にするのだ！　――諸君にはこの人物が、この奇蹟の男が、この地獄から来たオルフェウス[七九]が、この尊敬すべきハーメルンの笛吹き男が誰だかわかるか？
コロス　（全員で静かに踊りながら）
クラーク！　クラーク！　クラケラクラーク！[八〇]
もちろん　それは　オッフェンバックのジャック[八一]だよ！
外の要塞じゃ　砲撃が　止んだ
この調べを　聞き逃さないために！
（砲撃の音は全く穏やかな調子で鳴り続け、オーケストラ[八二]の大太鼓に移行する。）
おお　なんと甘く　心地よく
それでいて　足には　至極　快適だ！
クラーク！　クラーク！　クラケラクラーク！
ああ　すばらしい　オッフェンバックのジャック！
（三人のジュールは再び政府のデスクに座を占める。気球に乗ったユゴーはオルケストラの上空を漂う。）
オッフェンバック　（司令官の声音で）変身セヨ！（シャンジェ）
（ネズミたちは薄いオペラの衣装を着けたバレエの踊り子に変身する。ペランは踊り子たちを真剣に検分し、メモをとる。一同は極度の喜びに浸る。）
コロス
おお　こよなく愛らしい奇蹟！

見もの中の見もの！
　ギャラもないのに
　薄衣だけを　身にまとうとは！
われらの胃袋は　もう暴動は起こさない
われらは　いまや　空腹に耐えられる
心のための　ささやかな夕飯が
腹のための　昼飯にまさる！
バレエだ！　バレエだ！　バレエが来た！
敵のやつらめ、われらに近づいたら　ただではおかんぞ！

フェリー
国の救い主よ！　ネズミの救済者よ！
さあ　吹いてくれ　もっと豊かなメロディを！
オルフェウスが　黄泉から出てきたぞ
芸術と共和国を　結ばせようと！

ガンベッタ　（先と同様に）で、わたしのことは誰も考えてくれんのか？
　すべてを予見したというのに。

フェリー　（はっきりとガンベッタの方向を指さして）　市民諸君、高潔でありたまえ！　ガンベッタと同じ報いを受けるなら、諸君はパンテオンに引っかかるぞ！

ファーヴル　（突然、熱狂的にしゃべりだす。）ああ！　この魅惑にはもう抵抗できない！　声が戻った。わたしにもしゃべらせてくれ！

コロス　（熱狂して）いっそ踊れ！　いっそ踊れ！

ファーヴル　市民諸君、わたしの声を聞いてくれ！

コロス　だめだ！　歌え！　歌え！

ファーヴル　話すのだ！　わたしは話したいのだ！　――市民諸君！
　勇気と徳と諦念が、共和国の最初の義務だ！　――（話し続けるが、注意を向ける者はいない。）

コロス　（数人）歌え、まず踊れ！

ルフェーヴル　誰が音頭をとるんだ？

他の者たち　オッフェンバックだ！　オッフェンバックだ！
　（オッフェンバックは身振りで辞退して、再びトランペットを口にあてる。）

コロス
　われらがほしいのは　バレエと　ささやかな夕飯
　それに加えて　共和国風の　力強い小唄！

ユゴー　（守護神として気球で漂い続けながら）
　諸君は歌手を呼んでいる　それも比類のない歌手を
　その歌手はもう　守護神となって雲の中！
　わたしが歌うは　まことの歴史（イストワール）
　伝えるは　聖なる民の勝利（ヴィクトワール）
　勝利の地は　ラインとロワール
　そこに輝くは　とわの栄光（グロワール）
　わたしは歌おう　大胆な物語詩（ロマンツェン）で
　新たに創案した　スタンザ（シュタンツェン）で
　パリよ　それに合わせて　踊（タンツェン）るがよい！
（全員がコントルダンスの列を作る。国防軍のコロスはバレエの踊り子たちと組む。アルジェリア狙撃兵たちは種々のグロテスクなとんぼ返りなどをして加わる。――ジュール・ファーヴルは、劇が終わるまで熱烈な演説を続けるが、ごくたまに「永遠の恥辱！　――けっして！　けっして！　――石一個たりとも！　――野蛮人どもの要求」などといった、いくつかの言葉が聞こえてくるにすぎない。――ジュール・フェリーは絶えず彼を落ち着かせようとし、シモンはユゴーの詩句に耳を傾けて書き取っている。ガンベッタはオペラグラスで一部始終を観察し、メガホンを使ってコロスとともに歌のリフレインを歌うが、――つねに何拍か遅れる。）

コロス　（オッフェンバックがオーケストラ[八三]に合図を送り、トランペットで指

揮をしたり、自ら要所を甲高い音で変奏したりしているあいだに）

踊ろう！　踊ろう！

葦笛（ミルリトン）――トン――トン！

ワレラガ　歌イ踊ルノヲ　望ムノハ

フランス（ジェニー・ドゥ・フランス）ノ守護神（フランス）　ナノダ！

ユゴー　（自ら弾じる黄金の竪琴に合わせて朗唱風に）

「すべて歴史的なものは

――輪郭（トレ）――にすぎない[八四]

純粋に詩的なものを

わたしは――事実（フェ）――にする

（旋律的に）

正真正銘　フランス（ジェニー・ドゥ・フランス）ノ守護神（フランス）として

わたしは　けっして失わないぞ　平静（コントナンス）ヲ

勝利（ヴィクトワール）ト栄光（グロワール）ヲ

わたしは　つねに保持するぞ！

文明（シヴィリザシオン）

香油（ポマド）　石鹸（サヴォン）

これらは　わたしの主要な情熱（パシオン）

歌エ（シャンテ）　踊レ（ダンセ）

晩餐（アレゾス）ニ行ケ（ペ）！

ワタシ（ジュ）ガ望ムノハ（ヴー）　フランス（カンフランス）デ　人々（オン）ガ　楽シム（サミューズ）コトダ

そして　誰からも　求めはしない　口実（エクスキューズ）を」

オッフェンバック　（命令して）　踊り子（シェヌ）ヨ、手ヲツナ（デ）ゲ（ダム）！　――（踊り）

コロス

踊ロウ（ダンソン）！　歌オウ（シャントン）！

愛シ（エモン）ヨウ！　晩餐（スポン）ヲトロウ（ロン）！

ワレラガ　歌イ踊ルノヲ　望ムノハ

フランス（ジェニー・ドゥ・フランス）ノ守護神（フランス）ナノダ！

ユゴー

蛮人どもはラインを渡ってきた

葦笛（ミルリトン）！　葦笛（ミルリトン）！　トンテーヌ[八五]！

われらは　彼ら全員を　メースに追い込んだ

それをしたのは　バゼーヌ元帥！

葦笛（ミルリトン）！　プロン！　プロン！

スダンの戦いで

彼らを討ったは　残忍なマクマオン[八六]！

だが全軍を

トロシェ――トロシュが

ララドロン、ルドリュ[八八]だ！

そいつが　全軍を　パリの要塞に　かくまった

一八七〇年（ミルユイサンソワサントディス）

そのとき　これらすべてが　起きたのだ！

正真正銘　フランス（ジェニー・ドゥ・フランス）ノ守護神（フランス）として　等々

オッフェンバック　交差シャッセ（シャセ）！

コロス　踊ロウ（ダンソン）！　歌オウ（シャントン）！　等々

ユゴー

いまや　われら自らラインを渡り

葦笛（ミルリトン）！　葦笛（ミルリトン）！　トンテーヌ！

ドイツ全土を　占領した

マオンとバゼーヌを先頭（アラテト）に

シュネッテルタン[八九]　タン！　タン！

マインツ（マヤンス）とベルリン（ベルラン）

ドーナウとシュプレー[九〇]から　いたるはライン
将軍　閣下は
ヴィルヘルムスヘーエ[九一]にいます
トロープフラウ[九二]！　トロープマン！
トラトラタン！　タンタン！
三十万の兵士を従えて！
一八七〇年　等々
オッフェンバック　二人、前へ！
コロス　踊ロウ！　歌オウ！　等々
ユゴー
だが　フランスは寛大だ
敵の弱点を　進んでかばうのだ！
われらは　諸君を打ちのめしたが
いまは　そのわけも言わせてくれ！
諸君は敵として　パリを征服しなかった
だが　われらは友として　諸君に贈り物をしよう
なぜ　要塞の門を叩くのだ？
われらは門戸を開こうではないか
諸君が　こぞって渇望しているもの
それを　ここで諸君に贈ろう
カフェ　レストラン
美食家には　午餐
国民遊撃隊に
マビール・ダンスホール
パリの秘密に
おしろいも
鬚と香油

劇場　遊歩道
サーカス　競馬場
ヴァンドーム広場の記念柱
大衆音楽会
さらに何をお望みか！
おい　きみ！　哲学者の国の民か？
どうした　そんなに思い悩んで？
諸君が深刻ぶって　嫌われるなら
われらがここで　諸君を粋にしてあげよう
誰が諸君の『ファウスト』を　魅惑的だと思うだろう？
グノーが初めて　それを通俗的にした[九三]
ドン・カルロスにヴィルヘルム・テル[九四]
われらが初めて　彼らの皮をなめしたのだ[九五]
諸君はミニョンについて　何を知っているだろう[九六]
われらが　そのために葦笛を作ったのではなかったか？[九七]
諸君はシェイクスピアで　どもったが[九八]
われらは　初めてハムレットを口当たりよくしたのだ！[九九]
とはいえ　諸君には本当に独創性があった[一〇〇]
だが　パリ人からそれが失われたことはなかった
地獄から来たオルフェウス
われらは　彼を雇ったのだ
オッフェンバック　英国風ニ手ヲツナゲ！
ユゴー
さあ来たれ　髪を整え
香水をつけ　文明人となるがよい！
偉大なる国民[一〇一]は
報酬なしで　そうしてやるぞ

偉大なる国民は　諸君で金儲けなどできないのだ！
兵は去れ！
さあ　上がってこい！　外交官たちよ！
午餐（ディネ）だ！　晩餐（スペ）だ！
外交官（アタシェ）たちよ　来たれ！
オッフェンバック　ギャロップ！
ユゴー　正真正銘　フランス（ジェニー ドゥ フランス）ノ守護神として　等々
コロス　踊ロウ（ダンソン）！　歌オウ（シャントン）！　等々
（終幕の踊りが続いているあいだに、プロンプター・ボックスの口からヨーロッパ内外諸国の外交官たちがぞろぞろと上がってくる。ドイツの大きな宮廷劇場の監督たちがそれに続く。彼らは娘たちと不器用に踊り、コロスに冷やかされる。）
ルフランとバレエ
（幕切れでヴィクトル・ユゴーは多彩な花火によって神々しい姿に変容する。）

【訳注】

一　普仏戦争（一八七〇年七月～七一年一月）のさなか、ナポレオン三世がスダンの戦いでプロイセンの捕虜となったのを契機に、九月四日にパリで民衆が蜂起し、第二帝政を倒して第三共和制を宣言したが、その新体制下のパリも、同一九日にはプロイセン軍に包囲されることになった。

二　当時ヴァーグナーは《ジークフリート牧歌》を作曲中であった。

三　指揮者ハンス・リヒター Hans Richter（一八四三～一九一六）を指す。

四　Jacques Offenbach（一八一九～八〇）。フランスの作曲家。元来はケルン出身のユダヤ系ドイツ人。パリでオペレッタ作曲家として活躍し、のちにフランスに帰化。

五　オッフェンバックと黒人たち（Schwarze）も登場するが、不可解なことに、ここには掲げられていない。

六　Victor Hugo（一八〇五～八五）。一八五一年、ルイ・ナポレオンのクーデターに反対したことにより国外追放となり、亡命生活を送る。だが、一八七〇年九月、普仏戦争におけるスダンの戦いでナポレオン三世が捕虜となったことを契機にパリで民衆が蜂起し、第二帝政を倒して第三共和制を宣言すると、ユゴーはプロイセン軍に包囲されたパリに帰還し、一九年に及ぶ亡命に終止符を打つ。

七　原語はChorで合唱団のことだが、この作品がギリシア喜劇の手法を用いているので「コロス」と訳す。

八　Emile Perrin（一八一四～八五）。コメディ・フランセーズ監督。ここでは「オペラ監督Operndirektor」とされているが、劇中では「中尉Leutnant」として登場。

九　ここでは「公使館参事官Legationsrat」とされているが、劇中では「近衛兵ルフェーヴルGardist Lefèvre」として登場。

一〇　Jules Favre（一八〇九～八〇）。フランスの政治家。一八七〇～七一年、国防政府外務大臣。

一一　Jules Ferry（一八三二～九三）。フランスのジャーナリスト・政治家。共和主義者で国防政府に属した。一八五九年にワーグナーの知己となる。

一二　Jules François Simon（一八一四～九六）。フランスの政治家で哲学者。一八七〇～七一年、国防政府教育大臣。

一三　Léon Gambetta（一八三八～八二）。フランスの政治家。国防政府内務大臣。プロイセン軍に包囲されたパリから気球で脱出し、戦局の転換を試みた。

一四　Nadar（一八二〇～一九一〇）。本名はガスパール＝フェリクス・トゥ

ルナションGaspard-Féelix Tournachon。フランスの写真家、気球乗り。一八五八年、気球により世界初の空中撮影を行う。普仏戦争に際しては、軍事用気球による気球部隊を組織。

一五　Gustave Flourens（一八三八～七一）。フランスの革命家。「赤い共和主義」を標榜。

一六　Léon Guillaume Edmond Mégy（一八四一～八四）。フランスの軍人。元来は旋盤工で社会主義者。一八七〇年、殺人の廉で有罪判決を受けて収監されるが、九月四日、パリの民衆蜂起の際に解放されて国防軍に入隊し、軍功を上げる。

一七　原語はTurkos。Tirailleurs algériens（アルジェリア狙撃兵）の通称で、語源はフランス語のTurc（トルコ人）であるが、これはアルジェリアが一六世紀初頭から一八三〇年にフランスに占領されるまで、オスマン帝国の支配下にあったことに由来。一八四二年、フランスは現地人からなるこの部隊を組織。兵士はアラブの服装をして頭にターバンを巻いていた。アルジェリア独立（一九六二年）後の一九六四年まで存続。

一八　古代円形劇場の中心をなす円形の平土間。ここに合唱隊（コロス）が登場する。

一九　Thymele。ディオニュソスの供物台。古代ギリシアにおいて、喜劇は悲劇とあわせてディオニュソスの祭祀である大ディオニュシア祭で上演された。

二〇　原語はFaszes。一本の斧の周囲に棒を束ねたもの。ラテン語のfascis（束）の複数形fascesに由来。古代ローマの執政官などの権威の標章で、のちに団結の象徴として用いられ、「ファシズム」の語源ともなる。

二一　これはパリの下水道に通じている。

二二　フランス北東部、アルザス地方の中心都市で、ライン河左岸に位置する。中世から神聖ローマ帝国に属するが、一六八一年、ルイ一四世によりフランスに併合され、一八七一年、普仏戦争終結後にドイツ領となる。だが、第一次世界大戦終結後の一九一九年には、ヴェルサイユ条約により、再度フランスに帰属。第二次世界大戦中の一九四〇年にドイツの支配下に入るが、一九四四年にフランスが奪還し、現在にいたる。住民の多くはドイツ系で、ドイツ語の方言であるアルザス語（アルザス・ドイツ語）を母語とする。なお、原文ではドイツ語名のシュトラースブルクStraßburgとなっているが、本訳ではフランス語名を採用する。

二三　フランス北東部、ロレーヌ地方の中心都市で、モーゼル河左岸に位置する。中世から神聖ローマ帝国に属するが、一六四八年、三十年戦争終結後のヴェストファーレン（ウェストファリア）条約によりフランス領となる。だが、第一次世界大戦終結後の一九一九年には、ヴェルサイユ条約により、再度フランスに帰属。第二次世界大戦中の一九四〇年にドイツの支配下に入るが、一九四四年の米軍による占領を経てフランスに復帰し、現在にいたる。なお、原文ではドイツ語名のメッツMetz（フランス語名メースと綴りは同じ）となっているが、本訳ではフランス語名を採用する。

二四　これら二都市を象徴する女神像。

二五　一二音節からなる六脚短長格の詩形。一二世紀のフランスで成立した『アレクサンドロス大王伝説詩』を起源とし、一七世紀フランスのコルネイユとラシーヌの古典悲劇やモリエールの喜劇で用いられたほか、近代ではボードレールやマラルメなどにもこの形式による詩がある。

二六　*Les Misérable*。全五部一〇巻からなるユゴーの長編小説。作者亡命中の一八六二年に完成。ヴァーグナーは一八六五年八月にこの小説を読み、『鳶色の本』に次のような読後感を記している。「とてつもない才能だ！――何度か大声でこう叫ばずにはいられなかった。しかし、

どうしてこんなおぞましいことをいつまでも抱えていくのだろうか？

ユゴーのように老人になってまで。こんなことは警察か下院か評議会か参事会などに任せておけばよいではないか。簡単な統計報告書のほうが、すべてをもっと的確に伝えているのだから。なんといっても詩人とは、観察したことはなくてもすべてを知り、まさにすべてを明白に理解できるがゆえに、それについては一言も費やさず、ひとえに悪からの救済を案出して与えるものなのだ。これはほんとうだ！　ときどき崇高な気持ちにしてくれる個所もある。たとえば、自己告発する前のジャン・ヴァルジャンの魂の葛藤は見事に描かれている。」

二七　『レ・ミゼラブル』第五部第三章において、ジャン・ヴァルジャンが、六月暴動（一八三二）で重傷を負ったマリユスを背負ってパリの下水道を通り、バリケードから脱出すること。

二八　『レ・ミゼラブル』第五部第二章「巨獣のはらわたL'intestin de Léviathan」において、ユゴーはパリの下水道の歴史や様態について詳細に記述している。

二九　原文は„France"!と、フランス語で記されている。以下、フランス語による台詞の訳にはカタカナを用い、必要に応じてフランス語をカナ書きしたルビを振る。

三〇　注二八参照。

三一　Place de Grève。パリ市庁舎前の広場で、一八〇三年にPlace de l'Hotel-de-Ville（市庁舎広場）と改称。中世以来、処刑場として用いられた。ヴァーグナーは旧名を用い、かつドイツ語式にGrève-Platzと表記。

三二　Esmeralda。ユゴーの長編『ノートルダム・ド・パリ』*Notre-Dame de Paris*（一八三二）に登場するロマの踊り子。魔女裁判にかけられ処刑される。

三三　上記『ノートルダム・ド・パリ』を指す。

三四　Karl Ferdinand Gutzkow（一八一一～七八）。ドイツの小説家、劇作家、ジャーナリスト。若き日のヴァーグナーに多大な影響を与えた青年ドイツ派の中心的存在。

三五　Heinrich Laube（一八〇六～八四）。ドイツの作家、ジャーナリスト、劇場監督。青年ドイツ派に属し、ヴァーグナーに影響を与えるが、のちに芸術上の見解の対立から、両者は離反した。

三六　ギリシア劇のコロスは旋回しながら踊りかつ歌った。

三七　この歌の原文は以下のとおり。三行目の最後の語Replikは「返答」、「模作」を意味するが、この訳においては反映させなかった。

Republik! Republik! Republik blik blik!
Repubel Repubel Rebubel blik blik usw.
Repubel pubel pubel pupubel pupubel Replik! usw.

三八　注二二参照。なお、ケラーKellerという姓はドイツ語。

三九　ト書きには「アルザス方言で」とあるが、この歌詞は標準語で表記されている。

四〇　Schüré。モテューの言葉「誓エjurez」を人名シュレと聞き違える。なお、ヴァーグナーの親しい知人に、エドゥアール・シュレEdouard Schuréというアルザス出身の音楽著述家がいたが、この人物はヴァーグナー芸術のフランスにおける紹介者であった。

四一　フランス語のjurementには「宣誓」と「悪態」という二つの意味があり、モテューは前者の意味で用いたが、ケラーは後者の意味に解してアルザス・ドイツ語で悪態をつく。だが、モテューにはその意味がわからないことになっている。

四二　Thionvillier。ディーデンホーファーDiedenhoferのこと。「ディーデンホーファー」とはディーデンホーフェンDiedenhofen（メース北方に位置する町）の住民（出身者）という意味であり、ディーデンホーフェンのフランス名がティオンヴィルThionvilleであるので、その住民（出身者）という意味でこのように呼んだ。

四三　「石一個タリトモ」以下は、一八七〇年九月六日に外相ジュール・ファーヴルが行った宣言に基づく。だが、同年九月一九日に行われたファーヴルとビスマルクの会談において、ビスマルクはこの宣言を逆手にとって、アルザスとロレーヌの割譲を要求した。注六一参照。

四四　Börger。フランス語のcitoyenに相当するドイツ語Bürgerの訛り。ト書きに「方言で」と記されているが、このケラーの台詞で方言が用いられているのはこの一語のみ。

四五　「ドイツ語」と「しゃべる」についてはドイツ語のdeutschとspreken（低地ドイツ語／オランダ語）が用いられている。

四六　これ以後、モテューの台詞もほとんどドイツ語になる。

四七　ユゴーが『懲罰詩集』*Les Châtiments*（一八五三）において、ナポレオン三世と第二帝政を激しく攻撃していることを指す。

四八　Tropmannと綴られているが、アルザス出身の大量殺人犯ジャン＝バティスト・トロプマンJean-Baptiste Troppmann（一八四八～七〇）を指している。一家八人を殺害したトロプマンは、一八七〇年一月一九日、パリでギロチンにより公開処刑された。この事件はフランスの新聞によって大々的に報道されたので、スイスのトリープシェンにいたヴァーグナーの耳にも間違いなく届いていたはずである。「トロープマンの化けの皮を剥いだ」とは、ナポレオン三世の正体がトロプマンのような犯罪者であることを、ユゴーが暴いたことを指す。以下、劇中で「トロープマン」とあるのは、ナポレオン三世のことである。

四九　ナポレオン三世を指す。

五〇　ユゴーが亡命中に滞在していたドーヴァー海峡のガンジー島を指す。

五一　ガンジー島で書いた長編『海に働く人々』*Les travailleurs de la mer*（一八六六）に登場する大蛸。

五二　ジュール・ファーヴル、ジュール・フェリー、ジュール・シモンの三人を指す。

五三　Louis Joseph Ernest Picard（一八二一～七七）。フランスの政治家。

五四　Henri Rochefort（一八三〇～一九一三）。フランスの作家、ジャーナリスト、政治家。

五五　原語はRocher de Cancale。カンカルとは、フランス北西部ブルターニュの町で、海岸には巨大な岩が聳ている。

五六　Louis Jules Trochu（一八一五～九六）。フランスの将軍。プロイセン軍によるパリ包囲時の国防政府首班。

五七　Valérien。パリ西方一二キロの町シュレンにある要塞Fort du mont Valérienを指す。

五八　ファーヴルのこと。

五九　原語はGeschrecht der Julier。ジュールがラテン名ユリウスのフランス語形であることを踏まえている。ちなみに、ユリウス家とは古代ローマの名門で、カエサルもこの一族の出身。

六〇　原語はKultus。「崇拝」、「祭祀」といった意味もあり、モテューはその意味に解している。

六一　一八七〇年九月一九日に行われた。このときビスマルクは講話の条件として、アルザスとロレーヌの割譲を求めた。

六二　Plon。単なる語呂合わせのための無意味な語。

六三　マイアベーアGiacomo Meyerbeer（一七九一～一八六四）のオペラ《鬼のロベール》*Robert le Diable*（一八三一）の主人公。

六四　ロッシーニGioachino Rossini（一七九二～一八六八）のオペラ《ギョーム・テル》*Guillaume Tell*（一八二九）の主人公。

六五　Giuseppe Garibaldi（一八〇七～八二）。イタリアの軍事家。イタリア統一運動に貢献。一八七一年、普仏戦争の際に義勇軍を率いてプロイセン軍と戦った。

六六　敬虔主義Pietismusは、一七世紀末にドイツのルター派教会で発祥し、一八世紀中葉までヨーロッパのプロテスタント教会に伝播した宗教運

動で、聖書中心主義、個人の内的回心、厳格な自己規律と禁欲、信仰の社会的実践などを特徴とする。

六七　写真を撮ること。

六八　シラーFriedrich von Schiller（一七五〇～一八〇五）のこと。ここで引用されている詩句は『騎士の歌』*Reiterlied*（一七九七）の第二連冒頭。

六九　ドイツの詩人ニコラウス・ベカーNikolaus Becker（一八〇九～四五）のこと。ここで引用されている詩句は『ラインの歌』*Rheinlied*（一八四〇）の冒頭。ガンベッタは「ガリアの歌人」と言っているが、「ガリア」とはドイツではなく、古代ローマにおけるフランスの呼称である。

七〇　スダンで捕虜になったナポレオン三世のこと。注四八参照。

七一　ユゴーの長編『ノートルダム・ド・パリ』に登場するカジモドを想起させる。

七二　パンテオンPanthéonの原義。

七三　François-Achille Bazaine（一八一一～八八）。フランス軍元帥。メース要塞の守備にあたったが、プロイセン軍に降伏した。

七四　Tschendereläh。単なる語呂合わせのための無意味な語。

七五　「武器ヲトレ」から「大隊ヲ組織セヨ」まで「ラ・マルセイエーズ」の歌詞の一部。

七六　原語はSturmbockで、「突撃山羊」の意。古代から中世にかけての兵器で、前方に鉄を打ちつけた巨大な角材を枠組みに吊り下げたもの。

七七　原語はGarde Mabile。次のフルーランスの台詞にある「国民遊撃隊Garde Mobil」と韻を合わせるための造語。だがこの語は、注七八に記したマビーユ・ダンスホールBal Mabilleから連想されたもので、ヴァーグナーは綴りを間違えたか、故意に変えている。

七八　Bal Mabil。正確にはマビーユ・ダンスホールBal Mabille。一八三一年にダンス教師マビーユが設立した庶民向けのダンスホール。

七九　原語はOrpheus aus der Unterwelt。オッフェンバックのオペレッタ《地獄のオルフェウス》*Orpheus in der Unterwelt*（一八五八）のもじり。この作品の原題はフランス語で*Orphée aux Enfers*。

八〇　意味不明だが、次のト書きに記されている砲撃の音を模しているのかもしれない。

八一　原語はJack von Offenback。

八二　舞台上のオルケストラではなく管弦楽団のこと。この劇が当初オペラとして構想されたことの名残り。

八三　注八一参照。

八四　ゲーテJohann Wolfgang von Goethe（一七四九～一八三二）の『ファウスト第二部』*Faust. Der Tragödie zweiter Teil*（一八三二）幕切れで神秘の合唱が歌う「すべて移ろいゆくものは比喩にすぎない」のもじり。

八五　原語はTontaine。単なる語呂合わせのための無意味な語。

八六　Patrice de Mac-Mahon（一八〇八～九三）。フランスの将軍、政治家。

八七　原語はTrochéで、詩学用語のトロカイオス（強弱格あるいは長短格）のこと。トロシュという名を思い出せぬユゴーの言い間違え。

八八　Alexandre Ledru-Rollin（一八〇七～七四）。フランスの急進的共和主義の政治家。

八九　原語はSchnetteretin。単なる語呂合わせのための無意味な語。

九〇　Spree。ベルリンを貫流する川。

九一　Wilhelmshöhe。中部ドイツのカッセルにある城。一八七〇年九月にスダンで捕えられたナポレオン三世が、翌年三月までこの城に拘禁されていた。

九二　Tropfrau。トロープマンの「マン＝男性・夫」の部分を「フラウ＝女性・妻」に置き換えた語。トロープマンの妻、すなわちナポレオン三世の妃である皇后ウジェニーを指す。ウジェニーは一八七〇年一〇月に、ヴィルヘルムスヘーエに拘留中のナポレオン三世を訪ねた。

九三　Charles Gounod（一八一八～九三）。フランスの作曲家。ゲーテの『ファウスト』第一部*Faust. Der Trugödie erster Teil*（一八〇八）に基づいて、オペラ《ファウスト》*Faust*（一八五九）を作曲した。

九四　シラーの戯曲『ドン・カルロス、スペイン王子』*Don Carlos, Infant von Spanien*（一七八七）を指す。

九五　シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』*Wilhelm Tell*（一八〇四）を指す。

九六　シラーの『ドン・カルロス』に基づくヴェルディGiuseppe Verdi（一八一三～一九〇一）のオペラ《ドン・カルロ》*Don Carlos*は、パリ・オペラ座の委嘱で、フランス語台本による「フランス風グランド・オペラ」として、一八六七年にパリ・オペラ座で初演された。また、シラーの『ヴィルヘルム・テル』に基づくロッシーニの《ギョーム・テル》（注六四参照）もフランス語台本による作品で、一八二九年にパリ・オペラ座で初演された。「彼らの皮をなめした」とは上記の事実を指している。なお、「人の皮をなめすjm das Fell gerben」というドイツ語の表現は、「人を叩きのめす」という意味の慣用句として用いられるが、ここでは文字どおり「柔らかくする」という意味で用いられている。

九七　Mignon。ゲーテの長編『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』*Wilhelm Meisters Lehrjahre*（一七九六）に登場する薄幸のイタリア人少女。

九八　フランスの作曲家トマAmbroise Thomas（一八一一～九六）が、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』からミニョンに関する部分を抽出し、ハッピーエンドに仕立てたオペラ《ミニョン》（一八六六）を作曲したことを指す。

九九　アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルAugust Wilhelm Schlegel（一七六七～一八四五）やルートヴィヒ・ティークLudwig Tieck（一七七三～一八五三）などによるシェイクスピアのドイツ語訳を指す。

一〇〇　トマのオペラ《ハムレット》*Hamlet*（一八六八）を指す。

一〇一　フランス人のこと。

解題

本編はリヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner（一八一三～八三）の『ある降伏　古代の手法による喜劇』*Eine Kapitulation. Lustspiel in antiker Manier*（一八七〇）の全訳である。

以下、作品の成立と出版の経緯について記す。

一八七〇年一一月、ヴァーグナーはこの作品の散文草稿を、手記『鳶色の本』*Das Braune Buch*[二]に記したが、その表題は『降伏　アリストプ・ハーネス作の喜劇』*Die Capitulation. Lustspiel von Aristop. Hanes*となっていた。完成稿は一八七三年刊の「全集」第九巻[三]に収載されたが、そこでは、「降伏」を意味する名詞の綴りをドイツ語式に改めただけでなく、定冠詞を不定冠詞に替えることによって、「降伏」が「ある降伏」という比喩的な意味を帯びることになった。また、完成稿の表題に付記された「古代の手法」とは、ギリシア喜劇の手法であるが、散文草稿の表題に「アリストプ・ハーネス作」と添えられていることからも明らかなように、とりわけアテーナイの喜劇詩人アリストパネス Ἀριστοφάνης（前四五〇以後～前三八〇頃）の作劇法を示唆している。

翻訳の定本としては下記の版を使用した。

Richard Wagner: *Eine Kapitulaion.* In: Gesammelte Schriften und Dichtungen in zehn Bänden. Hrsg. von Wolfgang Golther. Berlin, Leipzig, Wien, Stuttgart: Verlagshaus Bong 1911, Bd. 9.

この作品は、プロイセン軍に包囲されたパリを舞台に実在の人物が実名で登場するという特異な構想で書かれているが、その成立の背景と経緯は以下のとおりである。

一八七〇年七月一九日、ナポレオン三世のプロイセンに対する宣戦布告によって開始した普仏戦争は、プロイセン軍の優勢のうちに展開し、九月一日のスダンの戦いでフランス軍が壊滅的な打撃を受けるとともに、ナポレオン三世が捕虜となった。これを契機に、九月四日にパリで民衆が蜂起し、第二帝政を倒して第三共和制を宣言したが、その新体制下のパリも、同一九日にはプロイセン軍に包囲されることになった。

こうした状況を背景に、ヴァーグナーはいわばリアルタイムでこの喜劇を書いたわけであるが、妻コージマの日記から推測すると、散文草稿を執筆したのは一一月六日から八日にかけてであり、完成稿は九日に着手し、一六日に完了したことになる。ちなみに、フランスが実際に降伏するのは、翌七一年一月二八日のことである。

ヴァーグナーは、当初この作品をオペラとして構想し、当時トリープシェンのヴァーグナー宅に滞在中だった指揮者ハンス・リヒターに作曲を委ねたが、リヒターは途中で作曲を放棄した。その理由については、ヴァーグナーが完成稿の序文に記しているところであるが、コージマの日記（一八七〇年一二月一六日）にも「晩、リヒターが『降伏』につけた曲を弾いてくれたが、彼がこの音楽の下に自分の名前を記すのを不快に思っていることが見て取れた」という記述がみられる。ここから、この音楽はリヒター自身が破棄したと推測することも可能だが、確証はできない。いずれにせよ楽譜が失われているので、その曲想や楽器編成などについては不明である。

先に述べたように、ヴァーグナーはこの作品においてギリシア喜劇の手法を用いているが、具体的には、冒頭に置かれたヴィクトル・ユゴーの長いモノローグと地下からの声との対話がギリシア劇のプロロゴスに相当することや、それに続いてコロスが入場し、最後まで退場することなく登場人物の台詞に反応して劇展開に関与することなどがそれに相当する。だが最も特徴的なのは、同時代人が実名で登場し、

コロスによる合唱や相の手をはさみながらナンセンスな議論を展開したり、悪ふざけにも等しい大騒ぎを繰り広げたりすることによって、その愚劣さをさらけ出す点であり、これはまさにアリストパネス喜劇の流儀なのである。ヴァーグナーが普仏戦争という現在進行中の出来事に取材した劇を書くに際して、こうしたアリストパネスの手法を用いたのは、実在するフランスの政治家やユゴーのような国民的大作家に劇中で愚行を演じさせることによって、フランスを徹底的に笑いのめすためにほかならない。ヴァーグナー自身は序文において、この喜劇の目的がフランス人を笑い物にすることにではなく、フランス人の愚行の独創性に照らして、ドイツ人の滑稽さを際立たせることにあるかのように記しているが、全編を一読すれば、それが上述した表題の改変とともに、ヴァーグナーによる偽装であることは明らかである。しかし、従来この喜劇については、こうしたヴァーグナーの悪意を隠蔽するような批評がなされてきた。たとえば、『鳶色の本』の編者ヨアヒム・ベルクフェルトは、序文におけるヴァーグナーの言葉を真に受けて、「事実、この劇が示しているのは、ドイツ軍に対するフランスの降伏ではなく、フランスの劇場に対するドイツ人の降伏である」[四]と述べているが、このような解釈には承服することができない。むしろ、マルティーン・グレーゴア=デリーンが指摘しているように、ここでは共和主義政府のメンバーが「その無力と呪文めいた民衆演説のゆえに笑いものにされ、劇場監督ペランとヴィクトル・ユゴーに作者は嘲弄を浴びせかけている」[五]のである。すなわち、作中でペランが上演を提案するマイアベーアとロッシーニの作品が、ヴァーグナーの厳しい批判の対象であること、また幕切れにユゴーがドイツ人に挙げてみせるフランス文化の産物が、ヴァーグナーがけっして評価していない浅薄なものばかりであることを見逃してはならないのである。

一　この散文草稿については、『年刊ワーグナー・フォーラム2009』（東海大学出版会、二〇〇九年）に、『鳶色の本』抄訳六として拙訳が掲載されている。

二　『鳶色の本』とは、ヴァーグナーが一八六五年から、中断期間をはさみつつも、死の前年の一八八二年まで書き綴った手記であり、その名は、手記が書き込まれた手帳の革表紙の色に由来する。ヴァーグナーの死後、妻コージマは内密な記述を多く含む『鳶色の本』を慎重に管理し、のちに娘のエーファ・チェンバレンに保管をゆだねた。だがエーファは計一四ページを切り取って破棄し、さらに五ページにわたって紙を貼り付けて記述を隠蔽したのち、一九三一年にバイロイト市ヴァーグナー記念館に寄贈した。現在、『鳶色の本』は、一九七六年に同記念館を前身として設立されたリヒャルト・ヴァーグナー博物館に収蔵されている。高い資料的価値をもつにもかかわらず、『鳶色の本』の全容は長らく公にされなかったが、一九七四年に紙を貼られたページが復元され、翌七五年、編者ヨアヒム・ベルクフェルトによる詳細な解題と注を付した下記の版として、チューリヒのアトランティス社から刊行された。

Richard Wagner: *Das Braune Buch*. Tagebuchaufzeichnungen 1865 bis 1882. Erste vollständige Veröffentlichung nach dem Originalmanuskript Wagners in der Richard-Wagner-Gedenkstätte der Stadt Bayreuth. Vorgelegt und kommentiert von Joachim Bergfeld, Zürich: Atlantis 1975.

三　Richard Wagner: *Eine Kapitulaion*. In: Gesammelte Schriften und Dichtungen in zehn Bänden. Leipzig: E. W. Fritzsch 1871-73, Bd. 9.

四　Richard Wagner: *Das Braune Buch*. Tagebuchaufzeichnungen 1865 bis 1882. Hg. v. Joachim Bergfeld. München: Piper 1988, S. 215.

五　Martin Gregor-Dellin: *Richard Wagner. Sein Leben — Sein Werk — Sein Jahrhundert*, München: Piper 1980, S. 632.